観光案内鳥瞰図における「外地」の表象

――吉田初三郎《臺灣全島鳥瞰圖》を通して――

日　並　彩　乃

The Representation of the Territories Occupied by Imperial Japan on YOSHIDA Hatsusaburo's *A Bird's-Eye View of the Island of Taiwan*

HINAMI Ayano

YOSHID Hatsusaburo (1884-1955) drew many bird's-eye views against the background of the spread of railways in the Meiji era and the travel boom of the Taisho era. It was commissioned byrailroad companyies, hotels, and local governments in various regions. His works were mass-produced and used as tourist maps.

At the request of the Taiwan Bank, set of 4 postcards entitled *A Bird's-Eye View of the Island of Taiwan* in 1937 was published. At that time, Taiwan was a part of Imperial Japan. He has visited Taiwan only once. That year is 1935 when Government-General Taiwan held on Taiwan 40 Anniversary Exhibition. His bird's-eye view called the same title as these postcards was exhibited in there. Therefore, it is possible *A Bird's-Eye View of the Island of Taiwan* drew in 1935 became the prototype of one published in 1937.

This paper analyzes *A Bird's-Eye View of the Island of Taiwan* in terms of theme and style to explore how he expressed Taiwan occupied by Imperial Japan.

キーワード：吉田初三郎（YOSHIDA Hatsusaburo）、台湾（Taiwan）、鳥瞰図（Bird's eye view）、金子常光（KANEKO Tsunemitsu）、観光（Tourism）

はじめに

吉田初三郎（1884〜1955）は、明治時代の鉄道の普及と大正時代の好景気の中で起こった旅行ブームを背景として、鉄道省や鉄道会社、バス会社、船会社といった各地の交通事業者、旅館やホテル、地方自治体、新聞社などの依頼によって、日本各地の鳥瞰図を作成した絵師である。彼の作品の多くは、絹本著色の原画をもとに印刷物として量産され、旅行用ハンドブックとして使用された。実地踏査を踏まえながら、独特のデフォルメを施した彼の作品は「初三郎式鳥瞰図」と呼ばれ、人気を博した。

初三郎は、戦後長らく忘れ去られていたが、平成十一年（1999）に堺市博物館で大規模な回顧展が開催されたことを切っ掛けに、再評価されるようになった[1)]。鳥瞰図は当時の景観が正確に記録された資料として扱われ、地理学や都市工学、観光学、歴史学などにおいて研究が盛んである。近年、所謂「外地」の鳥瞰図が、帝国主義による占有欲を視覚的なイメージとして創造したもので、流布されることによって植民地のイメージを伝播するメディアとしての役割を担ったことも明らかにされた[2)]。

これら先行研究の中で、初三郎式鳥瞰図が江戸時代の道中図の系譜に連なることや、作風においては鍬形蕙斎（1764〜1824）や五雲亭貞秀（1807〜1879）に影響を受けていることは何度となく指摘されてきたが[3)]、美術史において本格的な研究には至っていない。このような研究史は、鳥瞰図が地図と絵図の中間に位置するために、美術作品と見做されてこなかったことが大きな要因のひとつなのではないだろうか。彼の展覧会が美術館で開催されないことは象徴的である。

しかしながら、初三郎は、もともと洋画家になることを夢見て、関西美術院の鹿子木孟郎（1874〜1941）のもとで学んでおり、彼が目指したのは、経済的な安定を得ながらも、美術的な作品を描く「応用芸術家」として「日本全國名所圖繪」を完成させることだった[4)]。そうであっ

1）『パノラマ地図を旅する：「大正の広重」吉田初三郎の世界』（堺市博物館、1999年）。

2）平成二十九年（2017）に韓国・漢陽大学校博物館で「조감도 제국의 야심을 그리다（鳥瞰図、帝国の野心を描いた）」が開催されているが、図録は見つからなかった。日本でも、国際日本文化研究センターが主催となり、平成三十年（2018）に同様の意図に基づいて、大阪市立中央図書館で「想像×創造する帝国　吉田初三郎鳥瞰図へのいざない」が開催されている。図録は後述する。

3）①堀田典裕『吉田初三郎の鳥瞰図を読む：描かれた近代日本の風景』（河出書房新社、2009年）、②市川正夫「北斎の『道中図』が近代の『旅行案内図』に与えたもの：北斎と吉田初三郎」（『一般財団法人北斎館北斎研究所研究紀要＝ Bulletin of Hokusaikan』 9 、2016年）など。

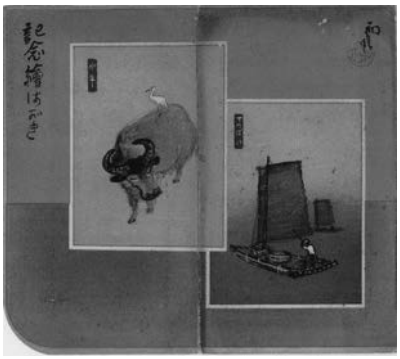
4）吉田初三郎「如何にして初三郎式鳥瞰図は生まれたか」（『旅と名所』創刊号『観光』改題22号、1928年）。

たなら、鳥瞰図は彼にとって「風景画」であったはずで、初三郎作品の核心を解明するには、図像分析を中心とした美術史的アプローチが不可欠であると筆者は考える。

以上を踏まえて、本稿は、昭和十二年（1937）に発行された絵葉書《臺灣全島鳥瞰圖》を「絵画」として図像分析し、同時代の観光ガイドや鳥瞰図、初三郎の台湾に関する一連の作品群と比較することによって、これまで初三郎式鳥瞰図に指摘されてきた特徴を美術史の観点から検証し、初三郎が描いた「外地」の風景表象を考察する。

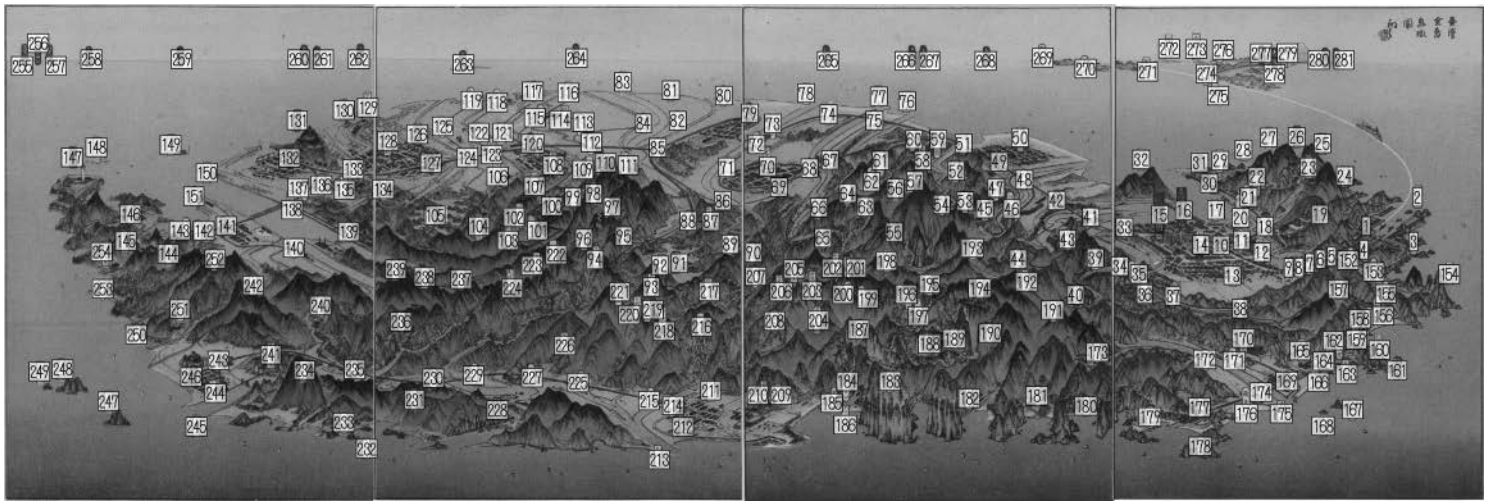
1　作品分析：主題と様式

絵葉書を収納するタトウには「記念繪はがき」、「初三郎作」の落款と「よしだ」が朱文円印風に記され、水牛とジャンク船の絵が描かれている［図１］。中には四枚一組の絵葉書が収納されている［図２］。タトウの折込にも、絵葉書の表面にも「株式會社臺灣銀行」、「京都祇園・觀光社印行」という記載がある。裏面には「吉田初三郎畫伯筆」の「臺灣全島鳥瞰圖」が印刷されてい



［図１］《臺灣全島鳥瞰圖》が収納されているタトウ

［図２］《臺灣全島鳥瞰圖》が印刷された絵葉書の表裏 昭和十二年（1937）京都祇園・観光社印行



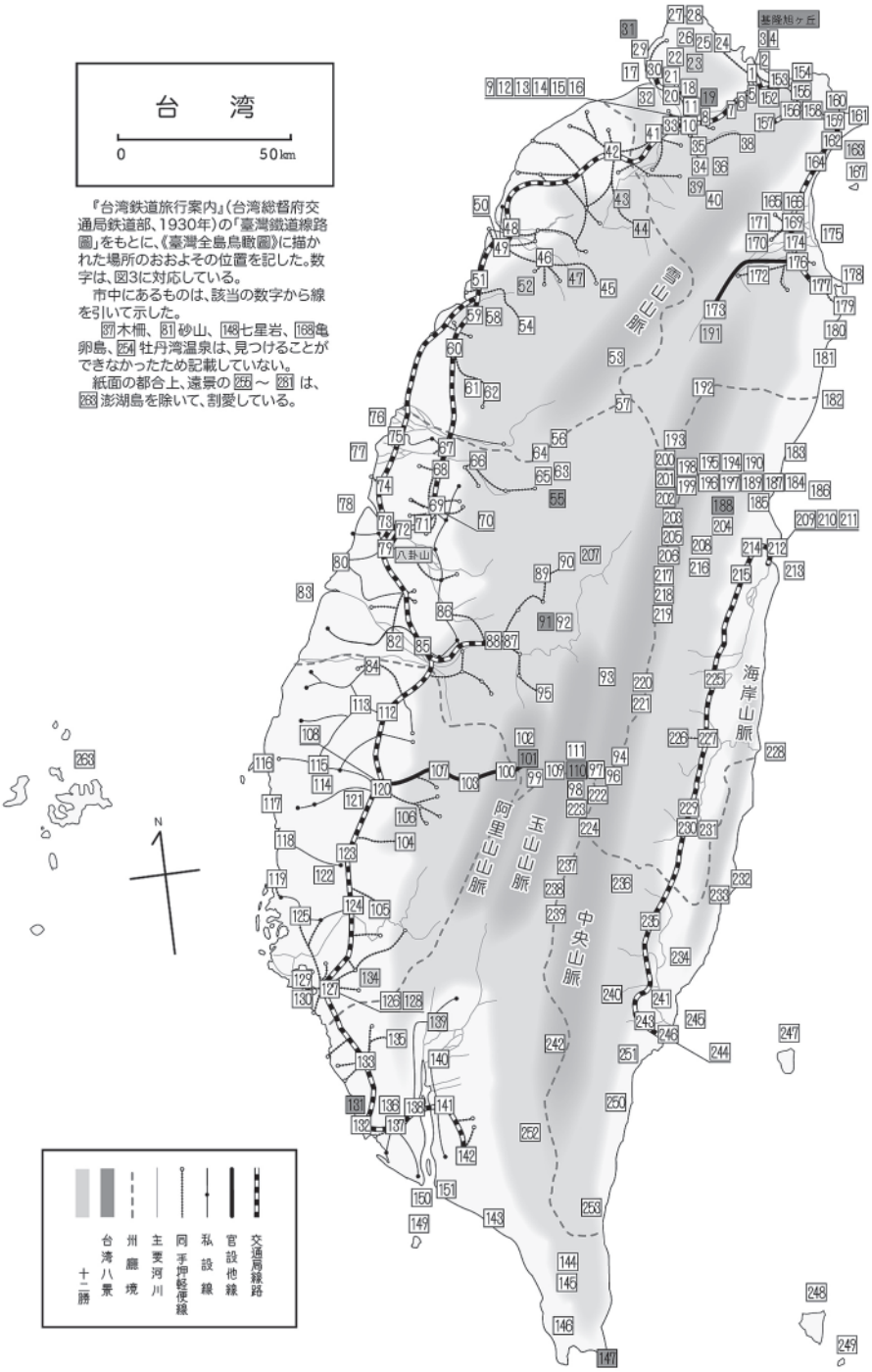
1	基隆	36	仙公廟	71	烏日	106	呉鳳廟	141	屏東	176	羅東	211	花蓮港廳	246	臺東
2	社寮島	37	木柵	72	王田	107	獨立山	142	溪州	177	蘇澳	212	花蓮港	247	火焼島
3	基隆神社	38	石碇	73	追分	108	嘉義公園	143	枋寮	178	北方澳	213	木瓜溪	248	紅頭嶼
4	高砂公園	39	新店碧潭	74	沙鹿	109	西山	144	石門	179	南方澳	214	吉野	249	小紅頭嶼
5	八堵	40	ウライ温泉	75	大甲	110	新高山	145	四重溪温泉	180	東澳	215	池南	250	太麻里
6	七堵	41	板橋	76	大安溪	111	北山	146	恒春	181	南澳	216	万代溪	251	知本温泉
7	五堵	42	桃園	77	大甲溪	112	斗南	147	鵝鑾鼻	182	大濁水溪	217	能高山	252	大武山
8	松山	43	大溪	78	大肚溪	113	虎尾	148	七星岩	183	清水断崖	218	白石山	253	大武
9	飛行場	44	角板山	79	彰化	114	媽祖廟	149	琉球嶼	184	タロコ口	219	安東軍山	254	牡丹灣温泉
10	臺北	45	井上温泉	80	鹿港	115	北港	150	下淡水溪	185	新城	220	大石公園(大石公山か?)	255	スラバヤ
11	圓山	46	竹東	81	砂山	116	口湖	151	東港	186	タツキリ溪	221	丹大山	256	スマラン
12	圓山公園	47	五指山	82	北斗	117	東石	152	暖々	187	仙賓橋	222	尖山	257	バタビヤ
13	臺北州廳	48	紅毛	83	濁水溪	118	布袋	153	瑞芳	188	タロコ峽	223	雪峯	258	シンガポール

14	新公園	49	新竹	84	西螺	119	北門	154	金瓜石	189	山月橋	224	南双頭山	259	マニラ
15	総督府	50	新竹州廳	85	二水	120	嘉義	155	候硐（猴硐か？）	190	バタカン	225	馬太鞍	260	香港
16	臺灣銀行本店	51	崎頂	86	南投	121	北回帰線標	156	三貂嶺	191	太平山	226	瑞穗温泉	261	廣東
17	淡水河	52	獅頭山	87	外車埕	122	塩水	157	菁桐坑	192	南湖大山	227	瑞穗	262	汕頭
18	士林	53	大霸尖山	88	水裡坑	123	新宮（新營か？）	158	武丹坑	193	中央尖山	228	秀姑巒溪	263	澎湖島
19	臺灣神社	54	南庄	89	埔里	124	番子田	159	澳底	194	大断崖	229	玉里	264	厦門
20	北投	55	八仙山	90	眉溪	125	佳里	160	北白川宮御上陸地	195	深水温泉	230	安通	265	福州
21	新北投	56	大雪山	91	日月潭	126	崁樓	161	三貂角	196	佐久間神社	231	安通温泉	266	漢口
22	北投温泉	57	次高山	92	水社大山	127	臺南	162	大里	197	タビト	232	三仙台	267	上海
23	草山温泉	58	錦水油田	93	東巒大山	128	臺南州廳	163	大里簡	198	畢祿山	233	新港	268	大連
24	金山温泉	59	造橋	94	マボラス山	129	ゼーランジヤ城	164	亀山	199	セラオカ	234	都巒山	269	新京
25	七星山	60	苗栗	95	東埔温泉	130	億載金城	165	礁溪温泉	200	セキガハラ	235	里瓏	270	京城
26	大屯山	61	出鑛坑油田	96	秀姑巒山	131	壽山	166	礁溪	201	北合歡山	236	新武呂峡	271	釜山
27	富貴角	62	大湖	97	八通関	132	高雄	167	亀山島	202	合歡山	237	関山	272	樺太
28	石門	63	明治温泉	98	南山	133	岡山	168	亀卵島	203	奇莱主山北峯	238	小関山	273	北海道
29	ゴルフリンクス	64	小雪山	99	新高口	134	虎頭埤	169	宜蘭	204	タロコ大山	239	卑南白山(卑南主山か?)	274	下関
30	淡水	65	クラス	100	阿里山	135	大岡山	170	宜蘭温泉	205	奇莱主山	240	紅葉温泉	275	門司
31	淡水	66	東勢	101	阿里山	136	泥火山	171	員山	206	奇莱主山南峯	241	臺東耶馬溪	276	青森
32	觀音山	67	后里	102	塔山	137	鳳山	172	三星	207	霧社	242	知本主山	277	神戸
33	萬華	68	豊原	103	奮起湖	138	九曲堂	173	土場温泉	208	天長断崖	243	馬蘭	278	大阪
34	新店	69	臺中	104	関子嶺温泉	139	旗山	174	二結	209	米崙山	244	臺東廳	279	京都
35	景尾	70	臺中州廳	105	鳥山頭	140	里港	175	濁水溪	210	花蓮港神社	245	卑南大溪	280	横濱
														281	東京

［図３］《臺灣全島鳥瞰圖》に記載された短冊一覧

■ **は八景、** ■ **は十二勝である。**

台湾島は、中央山脈を境として、北から南へと数字を付した。東西を判断し難い場合は、便宜上、吉田初三郎《国立公園大タロコ交通鳥瞰図》に描かれたものを東側とした。西側が１～151、東側が152～254、遠景の澎湖島、インドネシア、シンガポール、フィリピン、中国、韓国、日本などが255～281である。



［図４］《臺灣全島鳥瞰圖》と地図の対応

る。「其ノ一」から「其ノ四」までの図を横一列に並べると、ひとつの鳥瞰図になる。「其ノ一」の枠外右端には「昭和十二年六月廿八日第四七七號基隆要塞司令部許可済」、「其ノ四」の枠外左端には「昭和十二年六月廿五日臺灣軍司令部検閲済」と記されている。

本節では、主題と様式の観点から本図を分析する。本図は、主題の通り、穏やかな海に浮かぶ台湾島を東側から俯瞰した鳥瞰図である。画面右上に「臺灣全島鳥瞰圖　初三郎」の落款と、朱文円印を模した「よしだ」の記載がある。地名や施設名を明記した短冊が、図中に281ヶ所ある。赤い線で鉄道路線を表現し、その上に角丸の長方形で主要な駅名を記す。長方形は、地名や施設、中でも赤いものは特に個性的な自然や建築物などで、おそらく観光名所の意であろう。すべての短冊に番号を付して、一覧にし［図３］、地図上に記した［図４］。

まず、短冊の番号を用いて、台湾の歴史と地理を説明しながら、主題の観点から考察する[5)]。台湾は南北に長く、島の地形は煙草の葉の形に例えられる。五大山脈のうち中央山脈によって島は東西に二分されている。東部は五大山脈があるため、西部に平野が偏っている。初三郎は東側から見下ろしているため、向かって右が北、左が南である。したがって、海岸、中央、雪山、玉山、阿里山の五大山脈に隔てられた東側の169宜蘭、212花蓮港、246臺東が手前に描かれ、画面右に1基隆、10臺北、奥に西側の49新竹、69臺中、79彰化、120嘉義、127臺南、132高雄、画面左に140屏東などの大都市が点在している。絵葉書の裏面右下に「群青ノ地名ハ台湾銀行本店支店所在地ヲ示ス」とあるので、地名のうち群青のものは、台湾銀行がある場所になる。群青になっているのは、これら大都市に加えて、30淡水、42桃園、86南投、島影だけが見える263澎湖島、画面上部の水平線上の281東京、280横濱、278大阪、277神戸、当時日本の領土であった268大連、267上海、266漢口、265福州、264厦門、262汕頭、261廣東、260香港、259マニラ、258シンガポール、257バタビヤ、256スマラン、255スラバヤである。これら店舗の位置は、『台湾銀行四十年誌』[6)]に掲載されている「臺灣銀行營業所所在地」と一致している。うち、最も新しいマニラ支店の開業年月日は、絵葉書の発行の翌年八月一日開業であるから、初三郎は依頼主である台湾銀行から事前に知らされていたに違いない。

台湾の歴史を紐解くと、ヨーロッパ船で初めて台湾に到達したのは、大航海時代のポルトガ

5）本稿の歴史や地理に関する解説は、①臺灣總督府官房文書課『臺灣寫眞帖』（臺灣總督府官房文書課、1908年）、②『台湾の旅：始政四十周年記念台湾博覧会』（始政四十周年記念台湾博覧会協賛会、1935年）、③松本暁美・謝森展『台湾懐旧：1895-1945 THE TAIWAN 絵はがきが語る50年』（創意力文化事業、1990年）、④片倉佳史『台湾日本統治時代の50年：古写真が語る：1895-1945』（祥伝社、2015年）、⑤乃南アサ『ビジュアル年表台湾統治五十年』（講談社、2016年）、⑥陸傳傑『地図で読み解く　日本統治下の台湾』（創元社、2019年）を主要参考文献としている。

6）『台湾銀行四十年誌』（台湾銀行、1939年）。

ルの航海者である。鬱蒼とした樹林と美しい海岸を眺め、「Ilha Formosa（麗しの島）」と思わず叫んだという伝承が、台湾の欧名の起源とされている。十七世紀初頭に成立したオランダの東インド会社は、まず明朝領有下の263澎湖島を占領し、次に127臺南の西にある安平周辺を制圧して129ゼーランジヤ城を築き、東アジア貿易の拠点とした。同時期に、北部の1基隆、30淡水付近をスペイン勢力が開発し始めていたが、東インド会社が彼らを追放した。

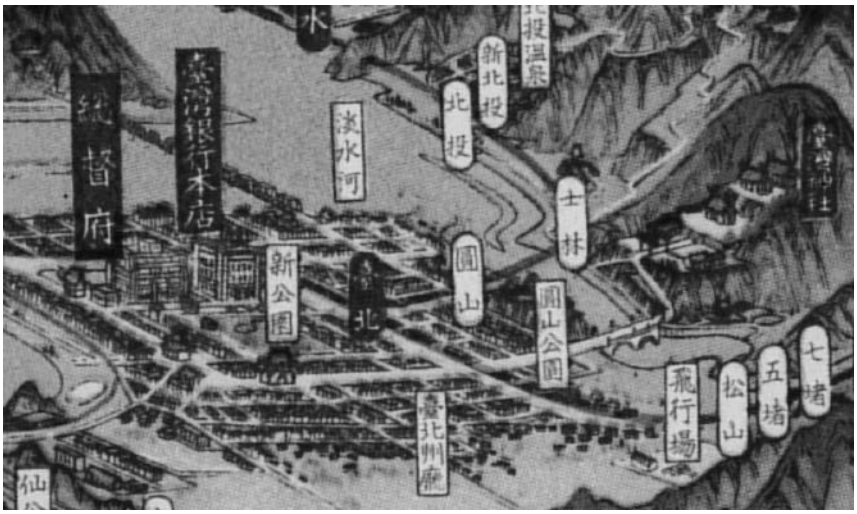
満州族の王朝である清への反攻の拠点を確保するために鄭成功が台湾へ進出し、寛文二年・康熙元年（1662）にオランダ人勢力は駆逐され、台湾は漢民族政権の統治下となった。天和三年・康熙二十二年（1683）、清朝が鄭氏政権を滅ぼしたため、台湾は清朝に編入され、対岸に位置する福建省、広東省から相次いで漢民族が西海岸へ移住した。この島には、タイヤル族、パイワン族、ツォウ族、プユマ族、ブヌン族、アミ族、タオ族などの原住民族が存在していたが[7]、漢民族系の移民による開拓が、西側の平野から、山岳部を中心とする辺境の地に及ぶに伴って、争いが避けられなくなり、理蕃政策が行われた。

日清戦争の結果、下関条約によって清朝から日本へと台湾は割譲され、明治二十八年・光緒二十一年（1895）から昭和二十年（1945）の第二次世界大戦終結まで、日本の統治下にあった。住民は新しい統治者を拒み、各地で戦闘が起こった。これを収めるため、北白川宮能久親王率いる近衛師団が組織された。160北白川宮御上陸地はその記念碑である。台湾には、原住民族、漢民族、そして日本人が混在することになった。日本人は原住民族を「蕃人」や「高砂族」と呼び、清朝統治時代に倣って理蕃政策を継続した。

内地から台湾に辿り着く当時の手段は、大阪商船と近海郵船の船舶のみであった。本図では、一隻の客船が277神戸から275門司を経由し、1基隆へ至る日台航路をなぞっている。大阪商船は、大阪を中心に関西の海運に従事し、領土の拡大に伴って「満韓支」などの外地との連絡にも力を注いだ。初三郎は、大正十四年（1925）大阪商船のために《大阪商船瀬戸内海航路図絵》を描くなど、浅からぬ縁があった[8]。1基隆は、日台航路だけでなく、国際貿易港、また島内への船の発着点になっており、台湾の玄関口だった。港の桟橋が駅に接続しており、縦貫鉄道はこれを起点として、西側の大都市である10臺北、49新竹、69臺中、79彰化、120嘉義、127臺南を結び、終点の132高雄へ繋がっている。このほか、1基隆と177蘇澳を結ぶ宜蘭線、156三貂嶺と157菁

7）「先住民」と表記すると、中国語では「すでに滅んでしまった民族」を意味するため、この表記は台湾では用いられていないという（順益台灣原住民博物館〈http://www.museum.org.tw/〉。本稿では、現地の呼称を尊重する。

8）松浦章「吉田初三郎と東アジアの汽船航路案内」『東アジア文化交渉研究＝ Journal of East Asian cultural interaction studies』 8 、2015年。



［図５］《臺灣全島鳥瞰圖》部分

洞坑を結ぶ平渓線、⑩臺北と㉚淡水を結ぶ淡水線などの支線、西部平原では産業の発展に従い糖業、塩業専用の軽便鉄道などが整備された。本図では、複雑な路線図が明晰に整理され、主要な駅だけが描かれている。

本図の中で、最も大きく且つ詳細に描かれているのは、首都⑩臺北である［図５］。総督官邸、⑬臺北州廟といった官庁や鉄道ホテル、郵便局、博物館、府医学校、医院、⑨飛行場、⑭新公園などの近代的な施設が多くあり、整然と区画整備された街並みは、アジア有数の美しい街として知られていた。その中に、依頼主である⑯臺灣銀行本店と、台湾の行政機関中枢である⑮総督府を大きく描く。台湾銀行は、明治三十二年（1899）に国策銀行として設立され、新領土台湾における中央銀行、紙幣の発行を行う特殊銀行としての役割を担っており、台湾の経済界に君臨していたことは勿論、日本の中国大陸や南洋への進出にも大きく関わっていた。⑯臺灣銀行本店のみならず、⑮総督府の名称まで群青色になっているのは、上記の台湾銀行の位置づけを示しているのだろう。

短冊に基づいて、本図に描かれた場所を整理すると、日本の統治下で建設された州庁などの近代建築（⑬㊿㊼⑫⑳）や神社（③⑲⑲⑥）、四大温泉である㉒北投、㉓草山、⑩④関子嶺、⑭⑤四重溪などを代表とする温泉（㉔㊵㊺⑥③⑨⑤⑯⑦⑰⑲⑤②②⑥②③①②④⑥②⑤①②⑤④）、㉙ゴルフリンクスなどのレジャー施設、⑤⑧錦水油田や⑥①出鑛坑油田、⑬⑥泥火山といった石油や天然ガス、⑮④金瓜石、牡丹坑、瑞芳の三金山など天然資源の産地、そして台湾八景といった名勝などである。「台湾八景」と

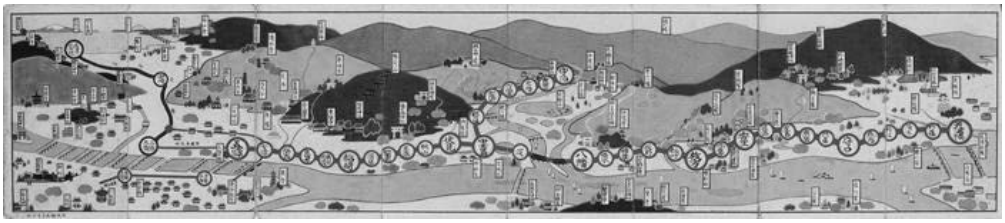
は、台湾を代表する景勝地として、昭和二年（1927）に『台湾日日新報』で選ばれた八つの景勝地の総称である。それに「十二勝」を付け加えて、台湾八景十二勝とした[9]。八景は、日本からの船が辿り着く港と家並みがある1基隆の旭ヶ岡の展望、31淡水、55八仙山、91日月潭、101阿里山、131壽山、188タロコ峡、日本の領土の最南端147鵝鑾鼻である。このほかに「別格」として、19臺灣神社と110新高山が選ばれている。これらは赤い短冊で区別されているが、1基隆の旭ヶ岡だけは短冊ではなく、近代的な港と街の景観を絵として表現している。十二勝は、23草山、39新店碧潭、43大溪、44角板山、47五指山、52獅頭山、八卦山、207霧社、134虎頭埤、139旗山、163大里簡、191太平山である。こちらも八卦山の短冊だけが描かれていない。八卦山は、彰化平野の中に孤立する一丘陵である。79彰化は、北白川宮能久親王率いる近衛師団が、台湾割譲を阻止しようとした清国の文武官や住民と交戦し、最も苦戦した場所とされている。この山は、御遺跡地として整備され、砲台などが展示されていた。八卦山があるはずの場所には、それらしい丘陵が絵として描かれているのだが、そのような景勝地としての描写はなされていない。

これら景勝の中で、本図の大半を占めているのは188タロコ峡である。厳しい山岳が多い東海岸は、太平洋に直面し、大波が打ち寄せる状況であったため、交通整備は遅れた。北は177蘇澳、南は212花蓮港まで鉄道を敷くことができたが、その間は断崖絶壁のため連絡交通が困難であった。大正五年（1916）に台湾総督府が工事に着手し、大正十四年（1925）に断崖の中腹を這うように歩行道路が開通した。さらに、昭和二年（1927）から昭和七年（1932）にかけて工事を行い、自動車道路に改修した。179南方澳漁から、180東澳、181南澳、182大濁水溪にかかる鉄線橋を渡って、山の半腹を切り開いた大理石のトンネル183清水断崖を通り抜けるこの道は、蘇花公路と呼ばれる。186タツキリ溪の河口で車を降り、この河口北詰の鉄橋がタロコ峡の184入り口となる。189山月橋、187仙寰橋などが架けられて道は整備されており、194大断崖や196佐久間神社などの見所や、奥には195深水温泉などがある。

次に、様式の観点から、本図を考察する。初三郎の作品は、主題となる土地の風土や歴史を事前調査した上で、自身が現地に入って踏査写生および取材を行うため、現実に正確である。先述の詳細な景観は、その成果を感じさせる。それを踏まえながら大胆なデフォルメを用いてひとつの鳥瞰図へとまとめ上げ、現実の再現ではない独特の視野を提供するのが「初三郎式鳥瞰図」の特徴である。

初三郎が初めて描いた鳥瞰図は、京阪電車に依頼された大正二年（1913）《京阪電車御案内》［図 6 ］である。彼は、洋画家になることを夢見て関西美術院で学んでいたが、師の鹿子木孟郎

9）『台湾日日新報』昭和二年（1927）八月二十七日。



［図 6］　吉田初三郎《京阪電車御案内》 大正二年（1913）

に勧められ、詮方なく「応用芸術家」へと転向した。この出来事は彼の心を深く傷つけたが 、翌三年の行啓の折に皇太子（後の昭和天皇）から「是れは奇麗で分かり易い、東京へ持ち歸って學友に頒ちたい」という本図への思わぬ嘉賞を得たことに感激をすると、一転して日本全国の名所図会を制作することを自らの目標と定め、以降は鳥瞰図だけを描き続ける[10]。本図は、淀川に沿って京都の三条と大阪の天満橋間を結ぶ京阪本線の駅名を図式するとともに、沿線の景観と名所が俯瞰構図で簡単に描かれている。「ヌーボー式圖案風」に描いたと初三郎自身が証言しているように[11]、曲線を多用し、明度が高く彩度が低い色彩を面的に使用しており、平面的である。ところが、「初三郎式鳥瞰図」は、西洋の「ヌーボー式圖案風」から出発したにも関わらず、この後は立体感や奥行きへの追及と並行して、近世の浮世絵へと表現を近づけていく。これは、『京都日出新聞』と『大阪時事』で、歌川広重（1797～1858）になぞらえて「大正の広重」と紹介されたことに因るだろう[12]。初三郎は、この呼称をいたく気に入って、その後自称するようになる。つまり、彼は自ら広重を見出したのではなく、大衆が望む「大正の広重」の呼称を体現するように、鳥瞰図を浮世絵に近づけていったのである。写実から離れ、あえて旧式を採用することにより、初三郎は個性を獲得し、芸術性を高めてゆく。ただ、図像に影響を及ぼしたのは広重ではなく、すでに指摘されているように鍬形蕙斎や五雲亭貞秀が描いた浮世絵とみて間違いない。さらに遡って、「貼札」のような場所の表記、四十五度以上の俯瞰構図や、群青と緑青を多用した自然の描き方、名所という主題そのものは「やまと絵」の伝統に帰することも可能である。図を絵画へと昇華してゆく過程は、職業絵師ではなく、当時日本にまだ定着していなかった商業画家として初三郎が成功するまでの奮闘と重なっている[13]。

10）吉田初三郎『大正広重物語』（大正名所図絵社、1923年）。

11）注 4 同文献。

12）注 3 ①同文献　9 頁。

13）本稿で述べた「初三郎式鳥瞰図」の分析は、コロナウイルスの流行によって中止となった2020年 3 月 7 日（土）第19回研究例会〈東アジアの思想と芸術の文化交渉研究班〉で「量産される近代日本の風景イメ

このような様式の変遷を踏まえて、本図を分析すると、本図は同じ頃に描かれた《高岡市鳥瞰図》、《札幌市鳥瞰図》などと同様の傾向を示しており、内地であっても外地であっても、自身の様式を貫徹したことがわかる。本図において、地形を踏まえつつ、鳥瞰図のテーマに相応しいモチーフを取捨選択し、必要に応じて大きさを変えつつ、全体の地形に配慮して、細部を組み合わせることによって、違和感なくひとつの地平の上に一目にまとめ上げる技術は成熟している。浮世絵の要素が後退する代わりに、見えないはずの遠方まで表現する遠近感を獲得し、雄大な眺望を形成するようになっている。本図が、陰影表現による立体感に乏しいのは、印刷技術を考慮する必要があるかもしれない。ところが、通例の様式とは異なった部分もある。北の1基隆と南の17鵝鑾鼻が、後方に引っ張られており、東海岸が手前に迫り出しているのは、描くべき場所を画面の中央に配し、左右の地形をＵ字型に湾曲して、一目の内に風景を収めるという通例に則っている。だとすれば、画面中央で大きく紙面を割かれた18タロコ峡が本図の主役となるはずだが、一番手前にあるはずの22花蓮港よりも、遠近を無視して巨大な都市となっている10臺北の方が目立っている。これについては後述するが、依頼主の16臺灣銀行本店への配慮でもあるだろう。これに関連して気にかかるのが、本図に描かれた本店が新築になっている点である。新営業所の設計は日本国内でも多くの銀行建築を手掛けた西村好時が担当し、鉄筋コンクリート造り三階建てだった。外観は、戦前の銀行建築の定番とも言うべき古典様式のデザインで、これは同銀行の本店として現在も使用されている[14]。新築落成は、昭和十二年（1937）九月十三日だったから、この絵葉書が検閲を終えた後になる。この謎を解く手掛かりは、インターネットオークションで、同銀行の完成図が二枚付属している同絵葉書が販売されていたことである。初三郎は、落成時にこの絵葉書を頒布するために、このような完成図などをもとにして初三郎が描いたのではないだろうか。そうであったなら、この絵葉書は、この本店新築落成「記念繪はがき」だったことになる。

2　吉田初三郎と台湾

初三郎は、昭和十年（1935）六月八日から十月二十五日までの四ヶ月と十八日の間台湾に滞在し、台湾を描いた作品を数多く遺している。長瀬昭之助氏によれば、台湾に到着後、初三郎は各県市町村長や知人友人への挨拶状を三千枚印刷し、送付している。内容を以下に引用する。

ージ──吉田初三郎鳥瞰図の分析を通して──」の発表原稿の一部に、加筆を行ったものである。

14）片倉佳史『台北・歴史建築探訪　日本が遺した建築遺産を歩く』（ウェッジ、2019年）。

謹啓　今秋、台北市に開催さるべき始政四十周年記念台湾大博覧会のため、全博覧会場を中心とせる、台北市、基隆、淡水、七星山及び草山、北投、金山の諸温泉、その他の景勝交通大鳥瞰図（原図は左右二間天地三尺）の力作執筆のため、門下前田穣、田坂昇、小林松太郎、中村慈郎等の一行と共に去る十四日来台。鉄道ホテル投宿、専ら前記各地にわたり、踏査写生中のところ、更に総督府交通局より同博覧会へ出品さるべき、台湾全島の大鳥瞰図を、屏風一双、天地六尺左右四間の大作として拝命謹筆の事と相成り、前記地方のほか、台中、台南、高雄その他の都市はもとより、新高山、八仙山、阿里山、次高山及び宜蘭、台タロコ、秀女古湾及び台湾八景、十二勝等山岳渓谷海光美の各方面にわたり大踏査写生に従事仕るべく、左記コースにより近く進発候事と相成候条自然錦地方面へ参伺致候節は、何分の御指導御高庇に浴したく、尚右完成の上は、更に、皆様の尊き御校閲を相仰ぎて、より大成を期したくと深く祈願罷り在り候、伏してよろしく御願申上候。

尚台湾八景、十二勝の原図は台湾日新報社よりの委嘱にて候。

昭和十年六月十四日　　台北市台湾鉄道ホテルにて　　吉田初三郎[15)]

これによれば、初三郎の台湾訪問は、始政四十周年記念台湾博覧会の会場案内図と、展覧会に出品する全島鳥瞰図を揮毫することが目的だった。この博覧会は、台湾総督府が後援となって、昭和十年（1935）十月十日から十一月二十八日までの五十日間開催された。明治二十八年（1895）の台湾統治以来の始政四十周年記念行事で、台北市を中心に、第一会場、第二会場、分場、草山分館の四つの展覧会場があった。台湾、朝鮮、満州などの日本の植民地や南洋に関する物産、交通建設、工業、風土、観光名所や、日本各府県物産の展示、各類の余興活動などが展示され、日本の政治的な成果を視覚化したものだった。四つの会場面積は合計四万余坪で、主要展覧館は合計約四十館、そして展示した産品は約三十万点に上る。台湾の人口の二分の一が来たという[16)]。明治維新の時から、日本は西洋を手本にして工業化を進展させ、かつ数回にわたり世界の万国博覧会に参加してきた。博覧会という概念を導入し、国内においても京都博覧会、東京大正博覧会などを開催した。台湾各地においても、共進会や勧業会、博覧会を行った。始政四十周年記念台湾博覧会は、この中で最大規模のものである。

この時、初三郎は五十三歳になっていた。大正二年（1913）《京阪電車御案内》［図６］で皇太子の称賛を浴び、鳥瞰図を生涯の仕事と定め、邁進し続けてから、二十二年の歳月が流れていた。初三郎は、数々の鳥瞰図を描いて経歴を重ね、大正十年（1921）版『鉄道旅行案内』の挿絵に抜擢されたことで一躍有名になった。昭和五年（1930）、鉄道省に国際観光局が設置され

15）長瀬昭之助『鳥瞰図絵師　吉田初三郎』（日本古地図学会出版部、2006年）。

16）山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』（風響社、2008年）。

ると、外国人観光客誘致のための《Beautiful Japan》のポスターを担当し、日本のパブリックイメージに大きな影響を与えた[17]。初三郎は、大正十一年（1922）に開催された平和記念東京博覧会に鉄道省運輸局の依頼で《日本を中心とせる世界の交通》を、昭和四年（1929）朝鮮総督府の依頼で《朝鮮博覧会図絵》を描いた実績があったから、今回の抜擢に不思議はない。世間でも「日本鳥瞰図の権威者」[18]と見做されるようになっていたようだ。

長瀬昭之助氏は、「昭和十年度初三郎作品譜」を引用し、この年に作られた一六八点のうち、台湾に関係する図が四十六点であることを明らかにしている[19]。ここから台湾を描いた作品を抜粋し、表に整理した［表１］。挨拶状では、博覧会に関する作品のほかには『台湾日日新報』に依頼された台湾八景しか記していないが[20]、実際は台湾の各州および市、さては日本製糖会社その他の民間まで、続々の委嘱があったようだ。

ここに記された作品に該当しそうなものは、いくつか確認することができた。「120 台北市（始政四十周年記念台湾博覧會用）」は、挨拶状の前半で語られていた「景勝交通大鳥瞰図（原図は左右二間天地三尺）」であり、始政四十年記念台湾博覧会協議会依頼の《始政四十周年記念臺北市鳥瞰圖》［図７］に相当し、「123 台灣全島（台灣総督府交通局鐵道部、台灣博覧會出品、天地八尺左右三十尺の大作）」は、挨拶状の「総督府交通局より同博覧会へ出品さるべき、台湾全島の鳥瞰図」とみて間違いないだろう。そのほか、124～126の「新竹市三景（台灣）」は、台湾国家図書館のデジタルアーカイブ「台湾記憶」[21]にあるものと同じであろう。同館所蔵の《高雄全洲景勝交通鳥瞰圖（其ノ一）》も、本稿で取り扱っている《臺灣全島鳥瞰圖》の絵葉書のように分断された「130 高雄州」の一部かもしれない。しかしながら、同館所蔵のウライ温泉を描いた《風光明媚的文山郡鳥瞰圖》や、八景と同じ体裁の《指南宮（仙公廟）》に該当しそうな作品名が無いので、この年譜はすべての作品を網羅してはいないようだ。「台灣双絶八景（現代日本最高の豪華版）」は、152～161に加え、別格の二枚を含めたすべてを函館市中央図書館デジタル資料館で見ることができる[22]。現在、堺市博物館に所蔵されている《台湾塩水港製糖工場鳥瞰図》は、「142 鹽水港製糖株式會社（甲圖）」、あるいは「143 同（乙圖）」の原画に該当する

17）岸文和「私は芸者ではありません ── 吉田初三郎《美の国日本》に見る女性表象のジレンマ」（近畿大学日本文化研究所編『変化と転換を見つめて』風媒社、2016年）。

18）「吉田畫伯の麗筆で全臺灣を一目に…　大博彩る豪華版　近く全島の景勝を繪の行脚」『台湾日日新報』昭和十年（1935）六月十五日。

19）注15同文献　144-145頁。

20）「『雙絶臺灣八景の』美しい繪葉書　愈よ本社から發賣」『台湾日日新報』昭和十年（1935）十月十二日。

21）台湾国家図書館のデジタルアーカイブ「台湾記憶」〈https://tm.ncl.edu.tw/index?lang=chn〉。

22）函館市中央図書館デジタル資料館〈http://archives.c.fun.ac.jp/〉。

［表１］　吉田初三郎の台湾関連作品

120	台北市（始政四十周年記念台灣博覧會用）
121	台南市
122	新高並に嘉義市
123	台灣全島（台灣総督府交通局鐵道部、台灣博覧會出品、天地八尺左右三十尺の大作）
124 125 126	**新竹市三景**（台灣） 新竹公園 新竹神社 新竹市鳥瞰圖
127 128 129	**基隆市三景**（台灣） みなと 市廳舍 基隆神社
130	高雄州
131	台南州
132	花蓮港廳（台灣）
133	タロコの大觀（交通局鐵道部用）
134	能高郡（台灣台中州）
135	タロコ觀光協會（台灣）
136	礁溪温泉（台灣）
137	草山温泉（台灣）
138	四重溪温泉（台灣）
139	圀際映畫館（台北市）
140	大屯山（台灣國立公園候補地）
141	日本製糖株式會社
142	鹽水港製糖株式會社（甲圖）
143	同（乙圖）
144	タロコ溪を中心とせる台灣の景勝繪巻
145	台灣總督官邸鳥瞰圖
146	八勝園全景（台北州北投温泉）
147	八勝園封筒圖案
148	同 用箋圖案
149	同 マッチ圖案（甲）
150	同 マッチ圖案（乙）
151	同 レツテル圖案
152 153 154 155 156 157 158 159 160 161	**台灣双絶八景（現代日本最高の豪華版）** 台灣神社 阿里山 新高山 八仙山 基隆旭ヶ丘 淡水 日月潭 タロコ ガランビ 壽山
162	東海自動車沿線案内（台灣）
163	東海自動車沿線ポスター（台灣）
164	台東に於ける今道組の土木事業と其景勝
165	山上ゴルフリンクス（台南州）

長瀬昭之助『鳥瞰図絵師 吉田初三郎』（日本古地図学会出版部、2006 年）の「昭和十年度初三郎作品譜」から台湾を描いた作品だけを抜粋した。表記はアラビア数字へ変更したが、番号はそのままである。

のではないだろうか。『台灣鳥瞰圖：一九三〇年代台灣地誌繪集』[23] に掲載されている《国立公園大タロコ交通鳥瞰図》［図８］と、《観光の花蓮港》[24]、《世界之絶勝 東海バス交通鳥瞰図 蘇澳

23）莊永明『台灣鳥瞰圖：一九三〇年代台灣地誌繪集』（遠流、2013年）。

24）公益財団法人日本台湾交流協会図書館（東京本部）には、台湾伝承文化が出版した複製の《台湾全島鳥瞰図》と《花蓮港庁鳥瞰図》が所蔵されている。

［図７］ 吉田初三郎《台北市鳥瞰図　始政四十周年記念》 昭和十年（1935）

［図８］ 吉田初三郎《国立公園大タロコ交通鳥瞰図》 昭和十年（1935）

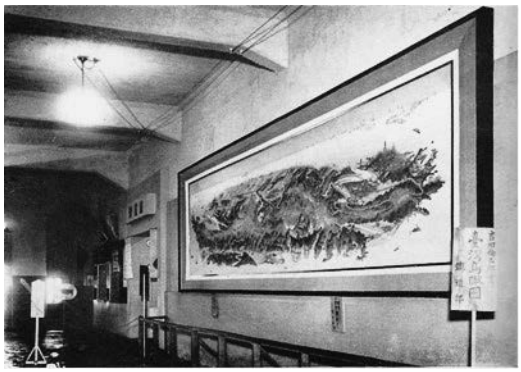
＝花蓮港》[25] は同じ図である。これは、「133 タロコの大觀（交通局鐵道部用）」か、「144 タロコ溪を中心とせる台灣の景勝繪巻」に当たりそうだが、《国立公園大タロコ交通鳥瞰図》は東海自動車運輸株式会社が発行しているので、「162 東海自動車沿線案内（台灣）」の可能性もある。

さて、初三郎はこれまでに、北海、樺太、朝鮮　満州　北京、青島、上海などに行ったことがあったが、彼が帰京後に執筆した「台湾旅笠道中記」によれば[26]、台湾踏査旅行はこのときが初めてで、その後行ったという記録は見出せない。したがって、昭和十二年（1937）に発行された《臺灣全島鳥瞰圖》の絵葉書は、この時の調査や作品を前提としていると考えるのが妥当だろう。

そうであるならば、最も可能性が高いのが、「123 台灣全島（台灣總督府交通局鐵道部、台灣博覧會出品、天地八尺左右三十尺の大作）」を原図として、あるいは銀行がある都市の名札を群青にするなど、これに手を加えて、絵葉書として印刷したことである。残念ながら博覧会に出品された鳥瞰図の行方はわからなかったが、写真が遺されている［図９］。博覧会の記録によれ

25）国立国会図書館デジタルコレクション〈https://dl.ndl.go.jp/〉。

26）「台湾旅笠道中記」は『京都日出新聞』に昭和十年（1935）十一月十日から二十四日まで全十五回を連載していた。



［図９］　吉田初三郎《臺灣鳥瞰図》　昭和十年（1935）

ば[27]、これが展示されていたのは、第一会場の交通土木館であった。これは、鉄道部、遞信部、道路港湾課、および内務局土木館の出品物が中心となっており、うち鉄道部のセクションは、鉄道に対する常識、鉄道公徳の普及、旅行推奨のための遊覧地紹介などに関するものを展示していた。展示物の一例としては、自動三輪車、観光ジオラマ、台湾遊覧案内、自動踏切警報器、東京駅模型、除雪ジオラマ、省線模型、台湾鉄道建設沿革史、局営バスジオラマなどであった。ところが、初三郎の鳥瞰図は、鉄道部の出品であるにもかかわらず、このセクションの中ではなく、縦八尺、横二十尺の大きな額面に収められ、二階へ上がる階段昇口の反対側の壁面に掛けられていた。挨拶状には、「天地六尺左右四間」の「屏風一双」と記し、年譜には「天地八尺左右三十尺」とあったが、実際は縦横幅が変更され、屏風を額装することになったのだろうか。そのあたりの事情は杳として知れないが、写真を見る限り、絵葉書の《臺灣全島鳥瞰圖》に、著しく似ているように見えるし、「本会出品用として吉田初三郎に揮毫を依頼し、東部海上より瞰下した景色を極彩色に描いたもの」であったという証言にも合致する[28]。また、昭和十二年（1937）に落成した台湾銀行本店が、同年に発行された《臺灣全島鳥瞰圖》に描かれていることは先に述べたが、実は、昭和十年（1935）に大窪四郎が描いた《大台北鳥瞰図》［図10］にも、まだ完成されていないはずの本店が描かれている[29]。したがって、同年に博覧会に出品された本図に、新築の本店が描かれていた可能性も十分にある。もっとも、矢内一磨氏は、《堺市鳥瞰

27）林恵玉編『始政四十周年記念台湾博覧会誌』復刻版近代日本博覧会資料集成：植民地博覧会１台湾：第１巻（国書刊行会、2012年）226頁。

28）注27同文献　314頁。

29）八戸クリニック街かどミュージアム館長兼学芸員である小倉学氏よりご教示いただいた。

［図10］　大窪四郎《大台北鳥瞰図》部分　昭和十年（1935）

図》の原画と印刷図を比較し、原画には都市の目標物として詳細に描かれていた川尻教会が印刷図では目標物として採用されていないことを一例にあげ、原図が印刷物として展開される間に手が加えられていることを明らかにしている[30]。これを踏まえると、例え写真の作品が原図であったとしても、印刷された絵葉書と完全に同じだとは限らない。

続いて、絵葉書の《臺灣全島鳥瞰圖》とその他の作品を比較してみると、前者が後者の組み合わせになっていることがわかる。大半を占めているのが、《国立公園大タロコ交通鳥瞰図》［図8］である。海岸線の地形の形状から山並みに至るまで、絵としてはほとんどそのままと云っていい。短冊がいくつか削られているのは、小さな絵葉書に島全景を描くために省略したという現実的な事情も考えられるが、日中戦争の勃発によって鳥瞰図の作成・頒布が禁止されたのが絵葉書発行と同年であることも関係しているのかもしれない。裏面で、㉘タロコ峡周辺の歴史や地理、見所と合わせて、そこへのアクセス方法を解説しながら、時折、発行元の東海自動車運輸株式会社の利便性をアピールしている。その中で、「車窓の左手から瞰下の絶景」がある蘇花公路の「ドライブ・ウェー」としての素晴らしさや、「最近　本道路に太魯閣峡を含めたるものを國立公園候補地として推挙」されたことを語っている。国立公園も博覧会同様、近代的な政策として重要だった。日本で国立公園法が公布されたのは昭和六年（1931）で、その後十二ヶ所の国立公園が指定された。曽山毅氏は、前述の「台湾八景」の選考が、住民の地域を代表する自然景観に対する関心を呼び起こし、それが国立公園の誘致へと繋がったと指摘している[31]。昭和二年（1927）頃には、台北で㉖大屯山一帯の国立公園化を希望する声が上がりはじめ、

30）『パノラマ地図セレクション ── 吉田初三郎の世界 ──』（堺市博物館、2010年）20-21頁。
31）曽山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』（青弓社、2003年）　256頁。

昭和八年（1933）に台湾国立公園法が制定、昭和十二年（1937）に大屯、次高タロコ、新高を台湾国立公園に指定するに至った。つまり、博覧会の際には正式に指定はなされていなかったわけだが、昭和八年（1933）に絵者不詳《新高山阿里山導覧》、金子常光が昭和九年（1934）に《國立公園候補地新高阿里山》と昭和十年（1935）に《大屯山彙》を描いていることから[32]、先んじて鳥瞰図は依頼されていたようだ。そして、《国立公園大タロコ交通鳥瞰図》もこのうちのひとつだったのだろう。初三郎は、日本の国立公園の動向に詳しく、《国立公園吉野熊野勝浦温泉鳥瞰図》や《国立公園十和田湖と大瀧温泉》など、これを主題とする作品も多いので、もしかすると台湾においても、早くから動向を知れる立場にあったかもしれない。このような国立公園の歴史と、台湾銀行に直接の関係を見いだせないことを考えると、⑱タロコ峡の国立公園指定は早くから意識されていて、博覧会の鳥瞰図にも描いていたのかもしれない。また、台湾始政四十周年記念博覧会のために注文された鳥瞰図は、前述の挨拶状にあるように「拝命謹筆」、つまり総督府から天皇陛下に捧げるためのものだったことも気にかかる。台湾の街は「宮城遥拝」のために、真東を向いて建てられていた。初三郎は云わば、皇居の方向に向かって遥拝をする台湾を正面から描いたのである。これらのことを考え合わせると、昭和十二年（1937）の絵葉書が、この博覧会において象徴的な役割を果たした鳥瞰図をもとにしたと考える方が円滑な気がする。

《臺灣全島鳥瞰圖》で大きく取り上げられていた⑩臺北の詳細な様子も、《始政四十周年記念臺北市鳥瞰圖》［図７］の取材経験を活かしているのだろう。本図では、西から鳥瞰した台北市の第一会場と第二会場を中心に、画面左には分場と草山分館、画面右には㊴新店碧潭や㊵ウライ温泉が一目に収められ、臺北植物園、⑬臺北州廳、三線道路、臺北公園、臺北帝国大學、榮町通、太平町、臺北橋、竹子湖湯元などの観光名所も忘れずに描く。裏面は、博覧会の解説ではなく、臺北市の概要と沿革を述べ、表面に記した博覧会会場に近い台北周辺の簡単な観光案内になっている。本図は、西から台北市を鳥瞰しているため、東から鳥瞰する《臺灣全島鳥瞰圖》とは方角が逆となるが、㊴新店碧潭や㊵ウライ温泉あたりの地形もおおよそ同じである。ただし、台湾始政四十年記念博覧会の会場は一切描かれていない。

細部を見ていくと、《臺灣全島鳥瞰圖》と《始政四十周年記念　臺北市鳥瞰圖》に描かれていた⑲臺灣神社は、距離が遠くなったため大雑把になっているものの、台湾八景のそれ［図11］が、ほとんどそのまま組み込まれている。㊱仙公廟の形も、絵葉書の《指南宮（仙公廟）》と同じ角度である。⑬壽山や⑰鵝鑾鼻、⑩新高山の形状も似通っている。ちなみに、「台湾旅笠道

32）三枚とも注23同文献に掲載されている。

［図11］　吉田初三郎「台湾八景」うち《台湾神社》
昭和十年（1935）

中記」[33] 全十五回には毎回一枚ずつ挿絵があり、うち十図は台湾八景と別格二景で、「159基隆旭ヶ丘」以外は絵葉書の図像と一致している。また、この道中記の中のジャンク船と水牛の挿絵は絵葉書のタトウに印刷されているものと同じである。

つまり、昭和十二年（1937）の《臺灣全島鳥瞰圖》は、昭和十年（1935）に、博覧会を切っ掛けに台湾へ行き、その時に引き受けた多くの鳥瞰図ために実地踏査した資料の中から、必要な場所を取捨選択し、台湾全島を一目するように図像の形を変えながら、組み合わせた寄せ集めになっている。初三郎は、自身の鳥瞰図製作の工程を、①実地踏査写生　②構図の苦心　③下図の苦心　④着彩　⑤装幀、編輯　⑥印刷の六段階に整理し、以下のように述べていた。

> 常に一つの中心を定めて、是に基礎を置き、更に部分的スケッチを幾百枚となく集め、是れを全交通にあてはめて、始めて山水の布置が決定せられるのである。是が仮りに平面図を立体的鳥瞰図的に再現するのであれば、其の骨組みの根本は、自然のままの山水布置にあるのであらうが、私は決して然ふではない。したがつて私の作品に於ては、必要と思はれる中心点が、随所で拡大されて、他は其の交通関係を示しつつ、全体の調子を繋いでをるに過ぎないのである。されば、一本の鉄道路線を書き入れるにも、全体の釣合いや角度を十分考えねばならない。そして夫等に中心をおきつつも、実際の風光気分を失ふまいとする所に、画家としての私の言ふべからざる苦心がひそんでゐるのである[34]

前節で行った《臺灣全島鳥瞰圖》の様式的特徴と、台湾に関する一連の作品群の図像との関係を分析すれば、初三郎のこの告白の意味がよくわかる。初三郎は千六百点を超える鳥瞰図を遺

33）注26同文献。
34）『旅と名所』22号、1928年（注３①同文献）。

したと云われている[35]。それが実現できた要因として、弟子たちを動員した工房制作であったことは勿論だが、多数の依頼のために、内地と外地を含めた日本全国を歩猟しながら、取材した場所を重ね合わせ、それぞれの鳥瞰図の目的に合わせながら、図像を繰り返し使うことによって、膨大な作品数を生み出していたと思われる。

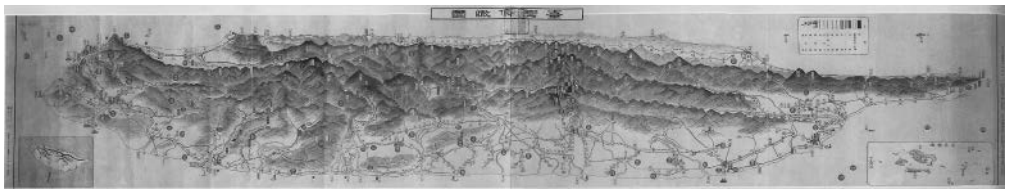
3 「産業地図」と「観光案内図」

大正二年（1913）の《京阪電車御案内》［図６］以降、初三郎式鳥瞰図の流行にあやかろうと、彼に倣った鳥瞰図絵師が数多く現れた。外地の鳥瞰図も頻繁に描かれ、うち台湾に関するものについては『台灣鳥瞰圖：一九三〇年代台灣地誌繪集』[36]に一部がまとめられている。同書に掲載されている台湾全島を鳥瞰した図は、昭和六年（1931）見元了筆《台灣俯瞰圖》［図12］、昭和八年（1933）一晴筆《台灣産業地圖》［図13］、昭和十年（1935）金子常光筆《臺灣鳥瞰圖》［図14］の三枚である。

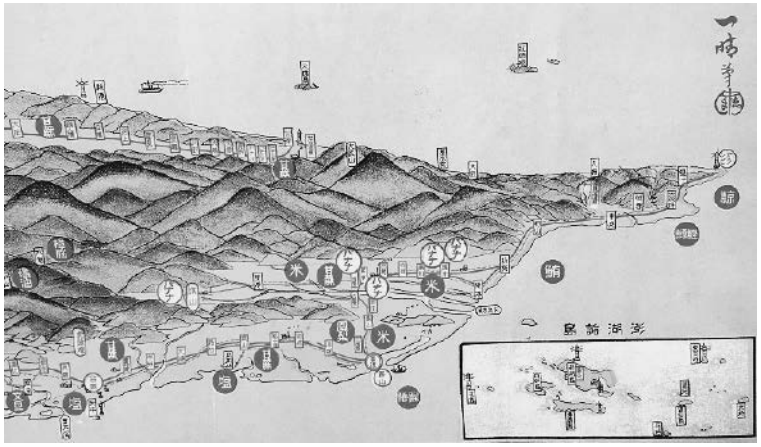
見元了と一晴の略歴は不明であるが、金子常光（1894～？）は、もともと初三郎の有力な弟子だった。初三郎が経営していた大正名所図会社の事務局長・専務であった小山吉三が、金銭上の不正を追及され、大正十一年（1923）に日本名所絵図会社を設立した際、彼に付いて独立した。藤本一美氏は、その後の常光が初三郎の最大のライバルとなったと指摘している[37]。《臺灣鳥瞰圖》［図14］は、常光が初三郎より一年早く台湾を訪れ、先述の台湾の国立公園の鳥瞰図とともに描いたうちのひとつである[38]。前述した初三郎の《始政四十周年記念　臺北市鳥瞰圖》［図７］と本図は、いずれも博覧会のためのリーフレットであった。前者は、博覧会事務局及び台北市役所から補助を受けて、一万部を作成し、博覧会開会式の招待者と、協賛会関係の各種大会出席者に土産として贈呈された。後者は、博覧会事務局との共同出資によって製作された[39]。

これら同時代の全島鳥瞰図と、初三郎のそれとを比較すると、見元作、一晴作、常光作は西側から、初三郎作は東側から鳥瞰しているため、南北が左右反転しているが、描かれている場所は基本的に同じである。大都市を繋ぐ鉄道路線と主要駅、台湾八景十二勝は勿論のこと、温

35）佐藤良宣「吉田初三郎・金子常光の鳥瞰図等について――平成23年度購入資料の紹介――」（『青森県立郷土館研究紀要』36、2012年）。
36）注23同文献。
37）藤本一美「鳥瞰図の世界」（『地図ジャーナル』137、2002年）。
38）藤本一美「地図楽　吉田初三郎の弟子達の群像（1）金子常光・中田富仙・柳城隆　おもに日本名所図絵社製の作品」（『地図情報』36(1)、2016年）
39）注27同文献　68頁。



［図12］　見元了《台灣俯瞰圖》 昭和六年（1931）



［図13］ 一晴《台灣産業地圖》部分　昭和八年（1933）

［図14］ 金子常光《臺灣鳥瞰圖》 昭和十年（1935）

泉やレジャー施設、目立った山々と河川、近海に散らばる島々は、昭和六年（1931）の見元作に出揃っている。見元作と一晴作の間に大きな違いはないが、常光作に至って、短冊は格段に増加しており、初三郎作に近づいている。そして、ここに描かれている場所は、『台湾鉄道旅行

案内』[40]や『台湾の旅：始政四十周年記念台湾博覧会』[41]、『台湾の栞』[42]など同時代の旅行案内書や観光用リーフレットに載っている主な観光地、名勝旧跡とも一致している。つまり、これら鳥瞰図は、総督府による開発と歩みを同じくしている。

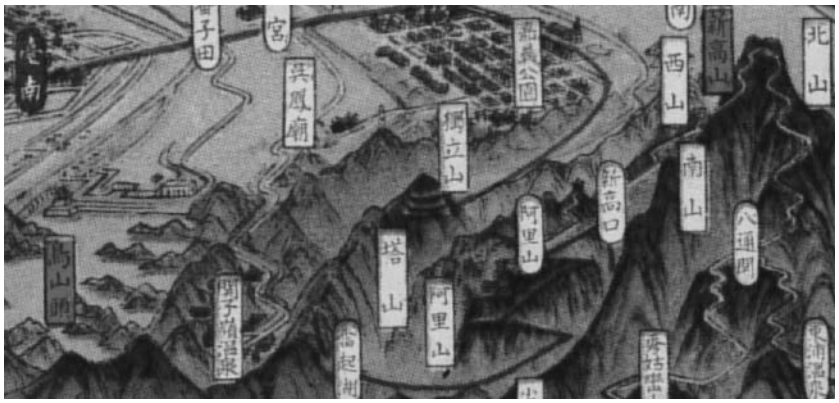
したがって、鳥瞰図に描かれているのは、日本人が、日本人の視野から発見した景色である。これらに掲載された地名は、和名に改められている。8松山、41板橋、132高雄、133岡山は、大正九年（1920）の行政区域設定の際に改称されたものであるし、57次高山や131壽山といった呼称も、大正十二年（1923）の皇太子行啓時の命名に因んでいる。台湾の最高峯は、「Mt. Morrison」でも「玉山」でもなく、日本一高い山という意味で、明治三十年（1897）昭和天皇に名づけられた110新高山と呼ぶ。鳥瞰図に描かれている台湾八景も、日本人が選び直したものだった。これは、清朝統治時代にも存在していたが、場所が異なっていた。『續脩臺灣府志』によれば、「安平晩渡」、「沙鯤漁火」、「鹿耳春潮」、「雞籠積雪」、「東溟暁日」、「西嶼落霞」、「澄臺觀海」、「斐亭聽濤」の八つであった[43]。清朝時代のそれは、台湾全島が影響下に無かったこともあり、現在の台南市周辺のものが多く選ばれていたが、日本のそれは全島を満遍なく含み、且つ19臺灣神社と110新高山を別格にしたことは、帝国の意図が露骨である。第一節で考察したように、初三郎が内地と外地を全く同じ様式で描いたことも考え合わせると、「その表象こそが内外地を連結させ、帝国日本の一体感を作り出す比類のない装置」となり、「奇抜な案内図で観光ブームに貢献した初三郎だったが、帝国の創出に一役を買ったこともまぎれない事実だった」[44]ことは、認めざるを得ない。

しかしながら、これらを比較すると、初三郎作だけが特産品の記載が無く、東側から鳥瞰しており、絵の描写が細かいという違いもある。これは、初三郎作以前の三者の主題が一晴作の表記の通り、「産業地図」であったことに起因している。その意図は、地形と産業と特産品を視覚化した学術資料、つまり現在、社会科の学習で使用する農林水産マップの役割が担わされている。産業を視覚化するならば、台湾を西側から描くことは必定である。前述のように、台湾島は、オランダ人が127臺南周辺に上陸したことにはじまり、清朝統治時代に対岸の中国大陸から進出してきた漢民族も島の西部から上陸したため、西部の平野から開発が広がっていった。

40）『台湾鉄道旅行案内』（台湾総督府交通局鉄道部、1935年）。
41）『台湾の旅：始政四十周年記念台湾博覧会』（始政四十周年記念台湾博覧会協賛会、1935年）。
42）『台湾の栞』（臺灣總督府臺灣物產介紹所、1935年）。
43）清余文儀等纂『續脩臺灣府志』（1774年）。
44）劉建輝・石川肇・古川綾子編『想像×創造する帝国　吉田初三郎鳥瞰図へのいざない』（大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　国際日本文化研究センター、2019年）57頁。

日本統治時代の開発は、それらを引き継いで行われているため、鳥瞰図は、必然的に、西海岸上空に視点を定めて全島を俯瞰することになる。

この違いは、八景の表現に顕著である。例えば、100阿里山［図15・16］は、風光明媚な八景のひとつであったが、付近一帯を含め、檜の原生林で知られ、55八仙山、101大平山とともに三大林業場だった。ここで伐採された美材は、明治神宮の大鳥居や橿原神宮、東福寺などの神社仏閣、或いは戦艦長門の甲番などに用いられた。阿里山鉄道は、木材を運び出すために敷設された簡易的な軽便鉄道で、総督府殖産局営林所によって管理された。勾配と急カーブが続く山



［図15］吉田初三郎《臺灣全島鳥瞰圖》部分

［図16］金子常光《臺灣鳥瞰圖》部分

岳路線だったため、米国ライマ社製の蒸気機関車を採用し、ここで伐採された木材は、沼平（通称100阿里山駅）に集められ、120嘉義まで運び出された。二つの駅の間は、標高差が二千メートル以上あったため、張出した尾根に塒を巻く107獨立山ループで一挙に高度を稼いだ。ところが、昭和時代に入ると、内地では見られない険しい地形と亜熱帯気候による珍しい動植物を鑑賞できるため、また新高山の登山口として、行楽客や登山客で賑わうことになった。観光客にとって107獨立山ループは、絶景を眺めることができる最大のハイライトであった。初三郎作は、110新高山の陰に隠れるはずの120嘉義から100阿里山までの道筋を地形に沿って案内し、緑青で描かれた美しい山間にある107獨立山ループは勿論、滝や渓流、奇岩怪石などがある103奮起湖や99新高口など、観光客にとって重要な情報を視覚化している。一方、見元・一晴・常光作は、見所であるはずの107獨立山ループを山の中腹に小さく示し、初三郎にはない檜、竹林、樟脳といった特産物を描き込んで、林業地として表現している。

また、101阿里山の南麓にある105鳥山頭は、八田與一が工事を指揮した巨大ダムがある。台湾南部の広大な平野は、降雨に極端な偏りがあり、水の利を得辛く、不毛の土地だった。清朝統治時代から、灌漑用水路を造営する計画が立てられたが、悉く失敗に終わった。日本統治時代には大規模な開発計画が立てられ、それを指揮したのが八田である。彼は、台湾中部を流れる83濁水溪から水を引き、84西螺、113虎尾、115北港などの地域を灌漑し、105鳥山頭ダムを設けて貯水をした。そこからの給水によって、台湾南部の平原はサトウキビ栽培を行う一大穀倉地帯となり、数多くの製糖会社が工場を建てるに至った。初三郎作は、そばに近代的な施設を整備していることを絵で表現しているものの、山々に囲まれた美しい湖として描いている。一方、一晴作は名称があるのみで湖はないが、見元・常光作は貯水池と記した上で、周辺に砂糖会社の位置を記すことによって産業を示している。茶、檜、米、砂糖、バナナ、さんご、樟脳、石炭など、その土地の特産物は、このような日本人による開発の成果を示しており、風景としての見所ではなく、産業の観点から八景を描いていたことを立証している。対して、初三郎は八景という名称の通り、景勝地としてこれらを描いている。

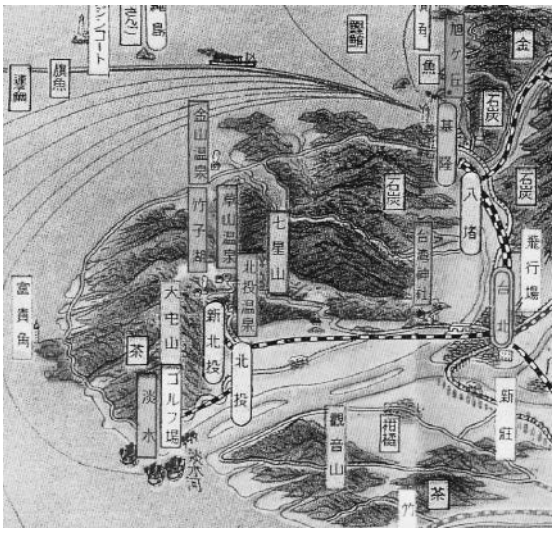
初三郎作が「観光案内図」に特化していることは、その他の短冊や描写の違いからもわかる。常光作が、初三郎作には無い212花蓮港の吉野村、豊田村、林田村といった日本統治時代に日本からの移住者が住んだ内地移民村や、琉球藩民の墓を描いているのは、「観光」への意識的なアプローチの乏しさを示している。前者は、貧しさゆえに台湾へ渡り、風土病の罹患や原住民族との葛藤、自然災害など多くの困難に合いながらも開拓を続けた日本統治時代の東部開拓の証である。後者は、明治四年（1871）に台湾の東海に難破して漂流した琉球藩民船が、牡丹社の蕃人等に斬首された事件に因む。これを清政府に抗議したところ、清政府が実効支配してない

管轄地域外での事件と返答があったため、犯罪捜査などを名目に日本が出兵し、日本による台湾統治へと繋がっていった。対して、初三郎作には当時の政治問題に繋がる血生臭い事件の気配は全くない。初三郎が選んだのは、36仙公廟、106呉鳳廟、114媽祖廟のような漢族の民間信仰の宗教施設、清朝統治時代末期の砲台跡130億載金城、オランダ人が建造した129ゼーランジヤ城など、日本人にとって物珍しい文化である。八景同様、赤い長方形の貼札で126崁樓と241臺東耶馬溪を記している。126崁樓とは、オランダ人が築造したプロヴィンシャ城の旧址である赤崁楼を指すのではないだろうか。127臺南は、台湾最古の都市で、二百余年来、政治、文学、経済の交通の中心としてもっとも繁栄を極めており、これはそれを象徴する史跡である。241臺東耶馬溪は、大分県にある耶馬渓になぞらえて、196佐久間神社に祀られている五代総督佐久間左馬太が命名した。初三郎は過去に《耶馬渓案内》を描いており、彼にとって思い入れがあっただろう。ほかの三者が町並みなどを描かないのに対して、初三郎作が、短冊にない場所まで街の景観を細かく描いているのもこのためである。最も大きく描かれている10臺北に顕著だが、中心街から19臺灣神社に向かうには、大直山と11圓山との間を貫流する基隆川に架設された橋を渡る必要がある［図４］。短冊が無くとも、これが最も美しい橋と讃えられた二代目明治橋であると一瞥してわかる。また、中心地には東門と南門と思われるものが描かれている。これらの正式名称は、景福門と麗正門と云い、清朝統治時代に建設された台北城の名残である。日本統治時代に総督府により門から伸びていた市壁は撤去されたものの門は現在まで残されている。

つまり、初三郎が描いたのは、日本統治時代に近代化してゆく台湾ではなく、オランダ、清朝そして日本による統治という複雑な歴史の中で、混ざり合う文化や、島独特の気候や地形によってもたらされた山岳や河川などの珍しい自然景といった観光客にとっての見所である。常光作は、島を西から鳥瞰しているので、地図の最上部は日本本土であり、最下部は中国の海岸となっている。そのため、前景の太平洋から台湾海峡にそれらを繋ぐ航路と海里が描かれているが、初三郎作は遠景の日本から日台航路によって台湾に上陸する日本人に焦点に絞り、日本から台湾へと観光客の視線を巧みに誘導している。日本と大陸を水平線上に並べて空間を処理することにより、情報は整理され、且つ日本と台湾との遥かなる距離が演出され、旅情を誘う。

様式の観点から、見元作から初三郎に至るまでの鳥瞰図を比較すると、見元作と一晴作の頃には横から眺めた山並だけを絵的に描いており、大きさと濃淡を変えることで若干の遠近感や自然を表現しているが、あくまで記号的である。それ以外は、土地の形にはなっているものの平面的で、風景画には到底及ばない。常光作になると、山並みの描写が細かくなり、実景に近づけるべく配置へ気を配り、立体感を獲得してくる。常光作が、見元作と一晴作と異なり、小さな長方形で目立たないように特産物を描いているのは、鳥瞰図全体の風景を損なうことが無

いように配慮したのだろう。初三郎作で特産物が削除されているのは、「産業地図」ではなかっただけでなく、実際にそこに存在しないものを排し、目に見える光景だけを描くことによって、風景画として成立させるためでもあっただろう。その点で、常光よりも一層、絵画としての指向が強い。前述のような内地からの観光客の見所を、「初三郎式鳥瞰図」に則って、それぞれの場所に配置しながらも、それらを立体感と、ひとつの地平を有する自然な奥行きを備えた空間の中にまとめ、図ではなく台湾全島を一目した風景画を創り上げるに至っている。常光作は、山岳描写の追及にとどまり、街は小さな四角を並べただけのものになっており、図的な表現を脱し切れていない［図17］。対して、初三郎は、街を構成する道路の形状や建築物といった細部まで拘り抜き、明確に描いている。それゆえに全体を眺めたときに、破綻が無く、ひとつの風景として受け入れることができる。とりわけ、初三郎作に顕著なのは、山水描写の拘りである。「産業案内図」では添景であったはずの山脈は、それぞれが有する固有の形に描き分けられ、その合間を流れる河川の形状は複雑だが、装飾的である。海岸線の地形も真に迫っており、特に台湾の中でも特異な188タロコ峡へ至る蘇花公路の断崖絶壁の連続は、東側から鳥瞰するからこそ描くことができた、最新の観光地であり、自然景である。台湾の面積は九州とほぼ同じで小さいが、三千メートルを超える高山が一三三座もあるために河川は急流で、侵蝕と堆積を繰り返している。大きな河は、北より17淡水、76大安、77大甲、78大肚、83濁水、150下淡水の各渓がある。台湾中部のやや南寄りの地点を東西に121北回帰線標が横切っているため、北部が亜熱



［図17］　金子常光《臺灣鳥瞰圖》 部分

帯気候、南部は熱帯気候に分けられ、日本とは異なった温暖で多湿な気候である。地図と見比べると［図４］、現実よりも山脈や河川などの自然は大きく誇張されていることがわかる。それによって、群青と緑青を使用した面積が広くなり、鬱蒼とした樹林と美しい海岸をもつ風光明媚な台湾「Ilha Formosa（麗しの島）」のイメージを絵画として現出させるに至っている。

おわりに

《臺灣全島鳥瞰圖》は、台湾銀行の依頼で昭和十二年（1935）に発行されたことから、同年の本店竣工の記念絵葉書だったと思われるが、確証がないのが現状である。初三郎が台湾に行ったのは、昭和十年（1935）の一度きりであるため、この時の実地踏査で集めた資料や、博覧会出品の全島鳥瞰図が本図のもとなった可能性が高い。

主題と様式の観点から図像を分析すると、本図は、総督府による台湾の開発の後ろ盾となった台湾銀行の経済力を表現していることになるだろう。台湾の交通は、東西が中央山脈で、南北は河川によって阻害されている。そのため、初期の台湾は小船による沿岸航行による交通が主であった。物理的な意味で、これら場所を結び付け、人と物資の輸送が実現させた縦貫鉄道の建設は、円滑に開発を進めるために総督府にとって最も急務であった。陸傳傑氏は、清朝統治時代以降、河川によって隔てられた陸路での交通が非常に不便であったため島内での交流は難しく、むしろ対岸の中国大陸との往来が盛んであったが、縦貫鉄道が、それまで単体だった都市を物理的に結び付けたことで、西部平野ではじめて単一市場が形成され、「台湾人」というアイデンティティの形成を促したことを指摘している[45]。つまり、台湾に張り巡らされた路線は統一の象徴である。支店は人口の多い大都市を中心に配置されるため、縦貫鉄道を中心とした鉄道路線が、それら都市を結び付け、島を囲んでいる。その中には、数々の温泉や景勝地、文化施設、近代的な街並みなどが存在している。台湾銀行の経済力を背景とした総督府の開発が、本図に描かれた美しい台湾の風景を創り上げたという成果を視覚化している。初三郎は、内地から訪れる観光客にとって珍しい文化や自然景観といった見所を、「初三郎式鳥瞰図」の様式に則って、それぞれの場所に配置して、さらに全体をまとめることによって、全体を眺めたときに破綻のない台湾全島を一目する風景画を創り上げ、自然豊かで風光明媚な台湾の風景をまさに観光の語源「sight（眺め）seeing（視野）」として内地から来る観光客へ提供している。

45）注５⑥同文献。

［図版出典］

図１・２・５・７・15は、八戸クリニック街かどミュージアム館長兼学芸員の小倉学氏より格別のご配慮を賜り、資料のご提供と掲載の許可をいただきました。

図３・４は、筆者が作成した。図３は、図２から絵を切り出し、筆者が数字を付した。図４は、注５に掲載した①臺灣總督府官房文書課『臺灣寫眞帖』（臺灣總督府官房文書課、1908年）、②『台湾の旅：始政四十周年記念台湾博覧会』（始政四十周年記念台湾博覧会協賛会、1935年）、③松本暁美・謝森展『台湾懐旧：1895-1945 THE TAIWAN 絵はがきが語る50年』（創意力文化事業、1990年）、④片倉佳史『台湾日本統治時代の50年：古写真が語る：1895-1945』（祥伝社、2015年）、⑤乃南アサ『ビジュアル年表台湾統治五十年』（講談社、2016年）、⑥陸傳傑『地図で読み解く　日本統治下の台湾』（創元社、2019年）に加え、片倉佳史『台湾鉄路と日本人 ── 線路に刻まれた日本の軌跡』（交通新聞社、2010年）、栗原純・鍾淑敏監修解説『近代台湾都市案内集成　第４巻　台湾鉄道旅行案内　1930年』（ゆまに書房、2013年）、『タロコと合歓越』（台湾総督府交通局鉄道部、1937年）を参考にして、google earth と Adobe Illustrator を使用して、筆者が描き起こした。

図６は、湯原公浩編『別冊太陽　大正・昭和の鳥瞰図絵師　吉田初三郎のパノラマ地図』（平凡社、2002年）より転載。

図９は、林恵玉編『始政四十周年記念台湾博覧会誌』復刻版近代日本博覧会資料集成：植民地博覧会１台湾：第１巻（国書刊行会、2012年）より転載。

図８・10・11・12・13・14・16・17は、莊永明『台灣鳥瞰圖：一九三〇年代台灣地誌繪集』（遠流、2013年）より転載。

【謝辞】

調査にあたっては、成田山仏教図書館、広島市立中央図書館、堺市博物館、八戸クリニック街かどミュージアムにご協力を賜りました。台湾で巡見調査を行うつもりでしたが、コロナウイルスの流行により渡航は叶わず、可能な範囲で国内調査を行うことになりました。感染拡大に伴って、国内であっても遠方への移動が困難になり、途方に暮れていたところ、八戸クリニック街かどミュージアム館長兼学芸員である小倉学氏より、《臺灣全島鳥瞰圖》、《始政四十周年記念　臺北市鳥瞰圖》を中心とした資料と貴重なご意見を賜り、なんとか本稿を書き上げることができました。同氏のご紹介で、朝鮮史をご研究されている田端尚徳氏より台湾の国立公園に関する資料をご提供いただことも重要でした。また、感染症対策などにより、いつも以上にご多忙のところ、堺市博物館学芸員の江坂正太氏がご担当してくださり、同館所蔵の《台湾塩水港製糖工場鳥瞰図》を特別閲覧することができました。そして、祖父である仲沢哲義氏は、幼少の頃を台湾で過ごし、終戦により日本に帰国した人です。今回、筆者が特に台湾の鳥瞰図に関心を持った切っ掛けでした。本稿の執筆にあたっても、重要な体験談と資料収集にご協力を賜りました。

以上のように、ご提供いただいた重要な資料やご意見を本稿に充分に生かすことができなかったのは、筆者の不徳の致すところです。本稿で触れられなかったことは、今後の課題とさせていただきます。本稿が、吉田初三郎研究に多少なりとも貢献することがあったなら、数々のご厚意への少しでもご恩をお返しできるようで、筆者にとって無常の喜びです。ご協力いただいた皆さまには感謝を申し上げるだけでは到底足りず、歯痒い思いですが、ここに記すことでせめてもの感謝の意を示します。謹んで御礼を申し上げます。